

藏の中

—— 映画文学人生論

宇野浩二 (1891-19261)

『倉の中』 (1919) 「文章世界」

『苦の世界』 (1919) 「解放」

『恋愛合戦』 (1920) 「改造」

『子を貸し屋』 (1923) 「太陽」

そして私は質屋に行こうと思ひました

宇野浩二の『藏の中』という小説は「そして私は質屋に行こうと思ひました」ではじまる。「そして」の前にも物語があるはずだが、それがどんな物語かはわからない。

「私が質屋に行かうといふのは、勿論質物を出しに行かうといふものではありません。と言って、又質物を入れに行くのでも無論ありません。私は今質に入れる一枚の着物も、一つの品物も持たないのです」。

では、着物好きで、貧乏な小説家だという私は何のために質屋へ行くのか。自分が質草として預けている着物がなつかしくなったので、虫干しをしたくなったからだ。そして、質屋の倉の二階にあがり、箆筒の引出しの中から着物を取り出し、窓格子から支柱や掛釘に麻縄を渡して、虫干しをした。そのうち、これも預けている自分の蒲団をしいて寝てしまう。

大正時代の昔とはいえ、ずいぶんのんびりとした、風変わりな話だ。

ふと目を覚ますと、「お目覚めですか？ 大変気持よさうですね」という声があった。女が微笑しながら枕元に立っている。年の頃はざっと三十歳、銀杏返に髪を上げ、細面に鼻の高い、きれいな目をしていて、少し陰のある、色の蒼白い、兎に角美しい女性だ。質屋の主人の妹で、出戻りのヒステリー美人だという噂は聞いている。



中蔵 ———— 映画文学人生論

「あなたはこれ迄に一度も奥さんをお迎えになつたことがありませんの？」と女は尋ねた。

「え、昔からこの通りの、独身者です」と答えたが、女物の質草が帳面に載っていることを指摘され、「こりや恐れ入りましたね。あれは二年ばかり独身でなかった時のものです」と白状した。

「でも、どうしてお別れになったの？ 男の方といふ者はどうしてさう薄情なんでせう」

「いや、僕が薄情どころですか！ 兎に角女がヒステリイもヒステリイ！」手に負へないヒステリイと言い続けようとして、ふと話している相手の彼女が、そのヒステリイのために目下離縁になつて、帰つて来て居ることを思いだした。

あわてて、「斯ういふ僕が男のヒステリイなんです。僕はしかし、常々、今の世にヒステリイのないような人間は、馬鹿か無神経だと思つてゐます」と、ヒステリイの弁護を始めたが、彼女は気分を害したかもしれぬ。

その翌朝、番頭がやってきて、虫干しを断られてしまった。その原因は主人が止めたからか、彼女が気分を害したからかはわからない。

質屋で着物の虫干しをしたと作家のモデルは近松秋江だが、ヒステリイ女とかかわりをもつたというのは宇野浩二の体験に基づくもので、その体験は『苦の世界』などの作品に描かれている。